

本日の主な論点

コロナ危機は、集中と効率を追求する社会のあり方に警鐘をならした。これまで地方分散型の地域像へと議論を進めてきた本研究会であるが、この事態を受けて、改めて変化の兆しを捉え直し、ポストコロナ時代における地域づくりの方向性を検討する。

論点 1 新しい生活文化（今回）

コロナ危機を契機とした暮らしや働き方の変化、家族やコミュニティの変容など、新しい生活文化の方向性について、前回会議で出た意見も踏まえて議論を深める。

（働き方や暮らし）

- ・デジタル化はフリーランス化を加速するか。フリーランス化は社会をどのように変えるか。また、そうした働き方を広げるために、何が必要か。
- ・オンライン化が進む一方で、その動きについていくことができない層を社会的弱者にしないように、どのような手立てを講じるべきか。
- ・リアルなスポーツ・芸術文化が制限を受ける中、巣ごもりカルチャーが注目された。スポーツ・文化や、余暇の過ごし方はこれを機に変わるだろうか。
- ・学校教育のオンライン化は進むのか。学校や教師の役割は今後どう変わるか。

（家族・コミュニティ）

- ・コロナ禍は、家族との過ごし方や仕事一辺倒の働き方を見つめ直す機会となった。時間や場所に縛られない暮らしが広がる未来の家族の形とはどのようなものか。
- ・家で過ごす時間が長くなることにより、地域コミュニティの結びつきは再び強まるのか。または、新たな形の地域コミュニティが生まれるのか。

（産業）

- ・デジタル化が加速し、場所や時間に縛られない新たな働き方が広がる。また、製造業の国内回帰が進むと言われる。世界では、プラットフォームの存在感が更に増していく。こうした中で、兵庫の産業をどのような方向に進化させていくべきか。

（価値観）

- ・コロナ危機を契機に、21世紀の課題とされる「孤独・退屈・不安」の様相に変化は生じるのか。ポストコロナ社会で、これらの課題にどうアプローチすればよいか。

論点 2 自立分散型の地域構造（次回予定）

コロナ危機は、都市集中のリスクを顕在化させた。一方で、都市は今後も人々を引き付ける力を持ち続けるだろう。目指すべき分散型の地域構造のイメージ、その実現に向けた課題等について議論する。

[前回の議論で出た主なキーワード]

◆ 産 業

- ・生活・暮らしと連動した「イノベーション産業」の育成が必要
- ・大企業型でも地元型でもない中間層（残余型）の社会階層がますます拡大
- ・製造業中心から、社会的インフラを支える多様な主体が担う経済への移行
- ・製造業の国内回帰の可能性

◆ 雇 用

- ・デジタル化による二極化（リモートワーカーとエッセンシャルワーカー）
- ・エッセンシャルワーカーの「生産性」を評価する新たな指標の必要性
- ・ベーシックインカムは人手不足業種の解消のためにこそ必要

◆ デジタル化の加速

- ・「全家庭をカバーする太い回線」はこれからの社会の基本インフラ
- ・新たなインフラ「デジタルプラットフォーム」に支えられる私たちの暮らし
- ・広がる世代の分断・・・オンラインで価値を生み出せる世代が社会の主役に
- ・オンライン化が進まない職業・階層へのサポートが行政の大きな役割に

◆ 家族の形・暮らし

- ・共同生活の効率性以上に「一緒にいることの心地よさ」が大事になる家族
- ・家族の「分離」から「再結合」へ・・・3世代同居が広がる可能性
- ・ワークスペースになる家・・・広さ、静かさ、自然環境等の快適性が重要に

◆ コミュニティ

- ・会社組織のコミュニティの存在感が低下
- ・オンラインコミュニティの台頭・・・新しい「集積」の形

◆ 空間・環境

- ・「施設管理」から周囲の景観や環境の価値も高める「エリアマネジメント」へ
- ・地縁的な自治組織が担ってきた地域の空間管理の今後のあり方
 - ・・・新しい価値観を持ったイノベーターたちの参画と新しい枠組みづくり

◆ 地方分散

- ・「疎の力」・・・離れていること、まばらに住むことの意味を再評価
- ・「密か疎か」ではなく「密でもあり疎でもある」の「いいとこ取り」の社会